

その 28 戦場の「万葉集」



安波牟日乎 其日等之良受 等許也未尔 伊豆礼能日麻豆 安礼古非乎良牟
「逢はむ日を その日と知らず 常闇(とこやみ)に いづれの日まで 我恋ひ居らむ」
(逢える日がいつとも知れず、真っ暗な気持ちでいつの日まで、わたしは恋い慕っていることだろう)

中臣宅守(巻 15・3742)

伊能知安良婆 安布許登母安良牟 和我由惠尔 波太奈於毛比曾 伊能知多尔敵波
「命あらば 逢ふこともあらむ 我が故に はだな思ひそ 命だに経(へ)ば」
(命があったら逢えましょう。わたしのことでひどく思い悩まないでください。命さえ無事であったら)

狭野弟上娘子(巻 15・3745)

作家の阿川弘之氏の他にも、「日めくり万葉集」に出演した選者の何人かが、戦場における「万葉集」について語ってくれた。その1人が、ノンフィクション作家の辺見じゅん氏。阿川氏と同じように、兵士たちが、それも、多くの若者たちが、万葉集を持って出征して行った事実を証言してくれた。辺見氏は、越中守大伴家持ゆかりの地、富山の出身でもあり、早くから万葉集に親しんできた歌人でもあった。

「第2次世界大戦の出征兵士やシベリア抑留者に話を聞くなかで、万葉集の存在の大きさに気づかされました。学徒出陣の人が1冊だけ本を持っていく時、一番多かったのが万葉集でした。その中でも、とりわけ、この
さのおとがみのおとめ なかとみのやかもち
狭野弟上娘子と中臣宅守の2人の相聞歌は若者たちの心をとらえたようでした」。

宅守は、天皇の宮に仕える女官弟上娘子を娶ったため、罪に問われたという説もあるが、禁忌を犯して越前に流刑となった。生き別れになった2人は互いに歌を贈り合い、その数、63首に及んだ。

辺見氏の話は、そこから太平洋戦争中万葉集が恋人たちの暗号に使われていたことに及んだ。

「ところで、戦地の若者が内地の恋人に便りをする時、軍事郵便の中にあなたが好きだとか、あなたを想っているという言葉は、検閲のハンコが押されますから書けません。僕の想いは何番のようですと書くと、女も察して万葉集を開く。そうすると、その番号の恋歌を見て、女は歌に詠まれた男の想いを受け止めるのです」。

では、この万葉集の歌番号とは一体何なのか？それについては、かつて越中国府があった富山県高岡市の高岡万葉歴史館坂本信幸館長が、「日めくり万葉集」ガイドブックに、軽妙なコラムを書いている。

<【問題】 ○か×で答えよ……「万葉集の総歌数は、4516 首である」。

試験でこんな問題が出たら…？大学の万葉集の試験としては「×」が正答である。エエッ！

こんにち、万葉集所載の何らかの歌を見よと思えば、その歌の番号を知っておればたどころにその歌の載っているページを開くことができる。そんな当たり前のことが行われるようになったのは、明治 34～36 年にかけて『国歌大観歌集部』（正編）が、松下大三郎・渡辺文雄によって編纂されてからである。「正編」には、万葉集・新葉和歌集・二十一代集・歴史歌集・日記草紙歌集・物語歌集を集め、集ごとに歌に番号を与えた。ただ、当時のテキストは底本が流布本であり、かつ研究が十分でなかったために、1 首の長歌を 2 分して 2 つの番号を付す間違いや、「或本歌」などの取り扱い問題もあり、4516 という数字は万葉集の正確な総数というわけではない。だから、「万葉集の総歌数は？」と尋ねられると、「国歌大観番号によると、4516 首です」と答えると正しい。

しかしながら、まさにコロンブスの卵で、たったそれだけのことで国文学研究が大きく進展した。番号で歌を示すことにより、容易に所在が求められ、用例を示すことができるようになったのである。それ故、こんにちでも、研究にあたっては「旧」の国歌大観番号を用いる。

それでは江戸時代には歌の所在をどう示していたか、というと、流布本である寛永版本の丁数の表・裏で示していた。巻 15 の 3745 は、版本では巻 15 の 33 丁の裏にあり、『十五・三三ウ』というように示したのである>

日本文学を広く世界に紹介した日本文学者で、文化勲章を受章した米国人ドナルド・キーン氏も、「日めくり万葉集」で、戦場の「万葉集」について証言している。

キーン氏は、太平洋戦争中アメリカ海軍の日本語学校を卒業すると前線に送られ、日本人捕虜の尋問や持ち物検査にあたったという。「私が初めて万葉集に出会ったのはその時のことでした。兵士たちが残した書類や所持品と向き合うことになったのですが、書類の他には文庫本が入った大きな箱がありました。いろんな本が入っていましたが、驚いたことに一番多かったのが万葉集でした。万葉集をずっと愛読してきた人が出征する時、どうしてもそれを待って行きたかったのでしょう。後々私が万葉集を研究することになったのもそれがきっかけでした」。

言うまでもないが、戦場の万葉集にまつわる話は、「日めくり万葉集」だけではなく、他にもいくつかある。とりわけ、特攻隊の記録の中には、いくつか鮮明な記憶として残っているものがある。本稿のその 2「万葉集由来の令和」で、特攻第 1 号の出撃の記録を紹介したのが、航空隊元参謀猪口力平と元飛行長中島正による共著『神風特別攻撃隊の記録』（昭和 38 年、雪華社刊。以下、『記録』という）である。それによると、特攻第 1 号として、軍神とたたえられた関行男大尉が、最初の特別攻撃隊の隊長に指名された時の様子について、当時首席参謀だった猪口中佐が、『記録』に書いている。猪口中佐は、航空隊副長玉井浅一中佐と相談して関大尉を指名することに決め、玉井副長が、自室に関大尉を呼んで本人に告げた。その時の、猪口中佐の記録である。

<「貴様に白羽の矢を立てたんだが、どうか？」と玉井副長が涙ぐんで尋ねた。「関大尉は唇を結んで何の返事もしない。（略）目をつむったまま深い考えに沈んでいった。身動きもしない。……1 秒、2 秒、3 秒、4 秒、5 秒……と、彼の手がわずかに動いて、髪をかき上げたかと思うと、静かに頭を持ち上げて言った。『ぜひ、私にやらせてください』。すこしよどみもない明瞭な口調であった」。その報告を聞いた猪口中佐は、『『特別の

ことだから隊に名前をつけてもらおうじゃないか」と言って考えた。その時ふと思いついて、『^{しんぷう}神風隊というのはどうだろう？』。すると、玉井副長も言下に、『それはいい、これで神風を起こさなくっちゃならんからなあ！』と賛成した』> (P44~45)

ということで、^{かみかぜ}神風特別攻撃隊は、当初は、「しんぷう」特別攻撃隊という呼び名で始まっている。

この関大尉が率いる「特攻第 1 号」以後、終戦までの間に、6418 名（特攻隊戦没者慰霊顕彰会調べ）の尊い若者たちの命が特攻により散華することになる。『記録』の最後には、^{しんぷう}神風特別攻撃隊戦没者名簿が記載されている。「布告」第 59 号（19・10・25）として、「戦 301 隊長 大尉 関行男」を筆頭に、24 頁（P202~227）にわたって、攻撃日、階級、氏名が記されている。その末尾には、（追記）として、「次の 17 名は昭和 20 年 8 月 15 日正午以降突入せるを以て布告に記載なし」、として、その名が書かれている。敗戦が決まった後のなんと悲壮な、そして、虚しい死だったのである。

『記録』には、特攻隊員の遺書（P174~184）と遺詠（P185）が収められている。その遺書の 1 つに、「今日は最後の日です。興国の興廃此の一戦に在り、大東亜決戦に南海の空の花と散ります。大君の御楯となって、分隊長を初め共にいさぎよく死につき、7 度生まれかわり宿敵を撃滅せん。ああ男子の本懐、是にすぐるものが又と有りませうか（略）ああ玉と砕けん特別攻撃。最後の夜 10 月 28 日 0100 於マニラ 勲」と、一等飛行兵曹松尾勲は、「大君の御楯になって死ぬ」覚悟を書き残している。

また、遺詠の歌の一部には、次のような歌があった。

「大君の 空の御楯と えらばれて 報いん時は 今ぞこのとき」

「大君の 皇楯となれる 身なりせば 鍊へざらめや 磨かざらめや」

「荒れ狂ふ 大海原に 水漬きし 雄々しき人に われはこたへん」

「己が身は 君の御楯と 散ろうとも 折々は帰る 母の夢路に」

以前、その 24「軍歌『海ゆかば』」で、万葉集中の「海ゆかば」と「醜の御楯」による忠君愛国教育が、少年たちにどのような影響を与えたのか、を問うたことがあった。これらの歌を読むと、ここに取り上げられた 7 名の若者の遺詠の内、5 名が、「海ゆかば」か「醜の御楯」を詠み込んだ歌を残している。それを見る限り、万葉秀歌を利用した軍国教育は見事に成果を上げていたことになる。



先に紹介した松尾一等兵曹の遺書の最後は、次のように書く。「ああ雄々しき名も彗星艦爆隊、我等第五義烈隊特別攻撃自爆隊、向ふ所は敵空母へ急降下。最後の影をカメラにおさめていただきましたので、何れゆくりニュース映画で見て下さい。笑って艦爆隊 16 勇士の姿を見てやってください」（P176）。

『笑って』勇士の姿を見てやってくださいとは、なんとつまらない言葉だが、他に、ある特攻隊員がその婚約者に宛てた遺書も、同じ言葉で終わっている。万葉集が大好きだった穴澤利夫大尉、23 歳。戦死した日から 4 日後、東京の婚約者の元に届いた遺書である。「婚約をしてあった男性として、散っていく男子として、女性であるあなたに少し言って征きたい。『あなたの幸を希ふ以外に何物もない』、『徒に過去の小義に拘る勿れ。あなたは過去に生きるのではない』、『勇気を持って、過去を忘れ、将来に新活面を見出すこと』」など、いずれ共に暮らすはずだった婚約者に、絶唱のごとき遺言を残している。そして、「今更、何を言ふか、と自分でも考へるが、ちよびり慾を言って見たい。一、読み度い本『万葉』（略）」として、真っ先に「万葉集」の名を挙げていた。そして、遺書の最後の最期の言葉。「今後は明るく朗らかに。自分も負けずに、朗らかに笑って征く」。この若者も、最後に、「朗らかに『笑って』征く」と書き、そして散っていった。（知覧特攻平和会館 HP）

『笑って』見てください、『笑って』征く、という若者たちの最期の言葉の奥に、「笑う」しかない憤怒、絶望、虚無が見えてくる思いがする。それは、『記録』の遺書の中に書かれた怒りの遺言と相通じる憤怒であり、絶望、虚無であろう。それら特攻隊員の怒りの遺言を抜き出して記す。

「雑音の多過ぎる浮世であった。たった一人の偉大なる指揮者が居なかったために、みんなが勝手な音調を発したために、遂に喧騒極まりない社会を出現したのであった。もっと落ち着いた人間社会が建設されなければならぬ。われ等は喜んで国家の苦難の真只中に飛込むであろう。われ等は常に偉大な祖国、美しい故郷、強い日本女性、美しい友情のみ存在する日本を理想の中に確持して敵艦に粉碎する」。（P180）

クラシック音楽が好きな青年だったのだろう、オーケストラに例えることで、指揮者、指導者への怒りや社会に対する無念の思いが、通奏低音のように静かに、心に沁み入るように、響きわたってくる。青年の名は、岡部平一少尉、行年 23 歳。

もう 1 人は、山口輝夫少尉、行年 23 歳の怒りの遺書である。

「私には私だけの考へ方もありましたが、もうそれは無駄ですから申しません。特に善良な大多数の国民を偽瞞した政治家たちだけは、今も心にくい気が致します。併し私は国体を信じ愛し美しいものと思ふが故に、政治家や統帥の輔弼者たちの命（めい）を奉じます」。（P184）

「自分だけの考へは申しません」と書きながら、「政治家たちは、大多数の国民を偽瞞した」として、その「政治家や統帥の輔弼者たちの命を奉じた」無念の思いを明確に、そして、「自分の考へ」を直截に、断固として書き残している。

特攻……昔話ではない。国や宗教は異なるけれど、今も同じ世界で繰り返される自爆テロや戦乱。私たちは、「政治家や統帥の輔弼者たちの命を奉じ」、空や海に散って行った若者たちの「笑う」しかない憤怒の思い、命の代償に残した怒りの言葉を、改めて今しっかり受け止めねばならない。

とりわけ、昨今の「政治家や統帥の輔弼者たち」に、是非とも聞いてほしい言葉であり、しっかりと受け止めてほしいメッセージである。